

論文題目：海老名弾正の神道理解と社会思想形成

氏名：洪 伊杓

1. 序論：問題設定と論文の目的

明治期における代表的な初期キリスト者である海老名弾正は、日本の近代化という変化の中でなぜキリスト教を受容したのか。また日本固有の宗教および思想である「神道」についてなぜ独特な解釈を試みたのか。彼にとって「キリスト教」と「神道」にはどのような関係性があるのか。この二つの宗教に関する海老名の思想は彼の社会思想にも影響を与えたのだろうか。本論文はこのような問いに答えるためいくつかの考察を試みた。最終的に、本論文は近代日本キリスト教思想史研究における「宗教と国家」の問題を海老名弾正というキリスト者を中心に究明することを目的とする。

第1部：海老名弾正の神道理解

2. 松山高吉の「神論」中心的神道理解

まず近代における日本キリスト者の神道理解の類型と系譜をまとめた。横浜バンド出身の高橋五郎は宗教を「良教」と「妄教」という二つに分類した後、神道は「妄教」に属すると否定的に評価し、それをキリスト教弁証の根拠とした。しかし彼の神道に対する排他的態度について、国学者出身である松山高吉は異なる立場を見せる。松山は神道を「無名の宗教」と「有名の宗教」の二つの時期に分類し、神道の原始性を安易に多神教的あるいは迷信と断定せず、日本古典の造物主である「天御中主神」を特に強調し、キリスト教の「創造主」概念と調和させようと試みた。しかし、その後形成された「天照大神」信仰や明治期から構築された近代天皇制(皇室・国家神道)に対しては批判的な立場であった。高橋と松山は両者ともに「神論」的な神道理解として分類できるが、高橋は神道をキリスト教の視点から排他的に考察し、松山は国学者出身のアイデンティティーを捨てず、その調和と接点の可能性を模索する立場をとった。

3. 海老名の「ロゴス・キリスト論」的な神道理解

(3-1. 海老名弾正の国家神道(神社神道)理解)

欧米宣教師を慕っていた松山は、反宣教師的で、植村正久とも神学論争を行なった海老名と思想的にも対立したため、神道についても二人は異なる見解を示した。すなわち海老名は、原始神道を多神教的であり迷信的だと批判した。しかし当時の社会進化論に基づいて唯一神的高等宗教として進化発展して来た近代天皇制(皇室・国家神道)の中から日本的ロゴスを見出し、それとキリスト教を結合させようと試みた。特に太古日本の「敬神」という概念に注目し、それはキリスト教神学の「ロゴス」概念のように歴史の底辺に流れてきた近世日本における復古神道と皇室の中で表面化したという考えである。結局そのように現れた日本的ロゴス(天照大神・天皇・大和魂)とキリスト教が一致することを模索したのである。ドイツ自由主義神学の影響で倫理的模範としてこの世に受肉し降臨したキリストの存在に海老名は関心が深かった。このような神学的立場は、倫理として強調された「国家神道」を基本的に肯定する背景になった。

しかし「ロゴス」論に注目した海老名にとっては、神道における「上帝」の日本版である「天御中主神」よりは、この世に降臨した天皇と直結する「天照大神」が最も重要な存在になった。

(3-2. 海老名弾正の教派神道(宗教神道)理解)

海老名は「天照大神」こそ日本の「敬神」精神であるとし、「天照大神」を異民族にも同等に伝えようとした黒住の教えに感化され、欧米のキリスト教ではなく、日本のキリスト教を植民地に扶植しようと考えられた「朝鮮伝道論」の発想と結合する。すなわち海老名は復古神道が「天御中主神」を中心に置いて設計した「国家神道」の限界を指摘し、黒住教が主張した「天照大神」の「宗教性・倫理性・世界性」とキリスト教との結合に関心を高めた。そこで「新日本精神」を唱え、「日本帝国」の膨張のためには世界的な宗教であるキリスト教と黒住が主張する「天照大神」の宗教的な豊かさや普遍性が同時に生かされるべきであるとした。「倫理的宗教」を求めた海老名にとって「天照大神」信仰を倫理的な面において進化発展させていた黒住教に期待し、それとキリスト教が結合する時、「天照大神」と結合したキリスト教の神が天皇とともに支配する「日本帝国=神の国」の建設が完成できると考えた。このように、国家神道の倫理性と教派神道(黒住教)の宗教性を肯定し、天と地、神と人を「ロゴス」という言葉で繋げようとした海老名の試みは「ロゴス・キリスト論的」神道理解として評できる。

(3-3. 海老名弾正の「ロゴス・キリスト論」中心の神道理解)

初期の「神論」中心的な考察はキリスト教の排他的な神概念に基づいて、神道とキリスト教の間に明確な線引きをする傾向があったが、海老名の「ロゴス・キリスト論」的な神道理解が登場することによって地上の歴史において形成された日本固有の精神価値を認めることにした。すなわち、観念的で、超越的な神存在との困難な結合の可能性を「ロゴス・キリスト論」によって、日本という地にて適用し、その結果「国体」として総括された「天照大神」と「天皇」という存在とキリスト教が矛盾せず、衝突しないまま結合できるような思想的基盤を提供した。

4. 海老名の「帝国神道的」キリスト教と弟子たちの「三位一体論」的な神道理解

(4-1. 植民地における帝国神道の形成と海老名)

海老名は、「天照大神」を宗教的な信仰の対象としていた黒住教の教えに注目し、「天照大神」の世界化・普遍化をキリスト教の神概念と結合させようとした。ここで国家神道が強調する「国体」にキリスト教が貢献する道が拓かれると考えた。すなわち「内地日本」において「倫理」として機能している「国家神道」を土台とし、「外地植民地」では「宗教・信仰」として機能している「帝国神道」を「日本的キリスト教」が補佐することによって、「帝国日本」が東洋世界において理想社会を形成するとの展望を示した。日本固有の思想(民族性)とキリスト教思想(世界性)の結合点があるとした海老名は、次のように国民国家の段階では倫理として近代性(一神教への進化)を完成した「国家神道」に基づいて日本を新たにし、その後、膨張する帝国では宗教性も認め、「世界化・普遍化」を目指す「帝国神道」に基づいて「日本的キリスト教」を帝国に扶植しようとしたのである。

「民族精神・内地・国家神道」 → 欧米キリスト教から離れた日本の組合(会衆)主義

「世界精神・帝国・帝国神道」 → 植民地における日本的キリスト教を扶植(朝鮮伝道論)

海老名は近代的な「国民国家」の段階を経て、「帝国」にまで至るのが地上での進化発展の終着地であると考え、そのような理想的な帝国の達成こそ「神の国」の実現であると信じた。結局海老名の神道理解は彼が構想した近代日本社会と帝国のあり方に関する問題と直結する。キリスト者としての彼の神道理解を社会思想形成と合わせて考察する理由がここにある。

(4-2. 戦時下における弟子たちの「三位一体論」中心の神道理解)

海老名の神道解釈は彼の弟子グループ、すなわち1930-40年代の組合教会の牧師や学者などによってより急進化して行く。渡瀬常吉、大谷美隆などによる過度な神道とキリスト教との合致の試みは、海老名の神道解釈を継承しながらも、その範疇を超えて行く。渡瀬は日本古典にある「造化三神」をキリスト教の「三位一体」教理と

同一視する神学的急進性を見せた。組合教会の信徒である法学者大谷も、渡瀬と同様で「天照大神」を強調しながら「三神としたけれども実は一神である」という三位一体論的な神道とキリスト教との結合を唱えた。大谷は特にキリストは「神の代表者」であるが、天皇は「神の代理者」であるので、この世に実際に現存する「神」は天皇である点を明らかにし、1930-40年代に盛んになった「現人神」概念をキリスト教思想で弁解した。このように戦時下に現れた海老名の弟子たちの神道理解は、海老名の「ロゴス・キリスト論」的な理解を踏まえつつ、海老名は本格的に語らなかつた「三位一体」論的な同一性まで語るほど急進化して行った。したがって、海老名の「ロゴス・キリスト論的」神道理解は、既存のキリスト教側の非妥協的な態度を変化させ、神道が持っているキリスト教との結合可能な要素に注目する視野を広めたという意味を持つ。つまり、1930-40年代の急進的な弟子たちの神道理解に海老名の教えは源流としての役割を果たした。

第2部：海老名弾正の社会思想形成

5. 海老名と大正デモクラシー世代の神道理解と社会思想の形成

(5-1. 大正デモクラシー世代の神道批判)

渡瀬・大谷のような神道理解を示した弟子たちがいる一方、いわゆる「大正デモクラシー」を導いた吉野作造・柏木義円・石川三四郎・中島重のような弟子たちも存在した。彼らは渡瀬などと異なり神道について批判的な立場を見せた。吉野も国家主導の「神社非宗教論」についてその論理的矛盾を批判した。柏木も神社参拝の参加は「宗教墮落及び偶像崇拜」であると神道に否定的であった。石川は『古事記』に描かれる神々の世界は私有財産も認められない部落共産社会であるとした。憲法学者であった中島重も「天皇機関説」を支持し、神道の「天孫降臨説」に基づいた「神権思想・天皇主権説」を受け入れなかつた。海老名と論争を行なった賀川豊彦は、政府の神社非宗教論や天皇が神聖性を信ぜず、「神道の復活」を「悲しむべき後退」と表現した。このように彼らの神道理解は海老名と根本的に異なっている。

(5-2. 会衆(組合)主義とデモクラシー)

組合(会衆)教会の牧師であった海老名は会衆主義を「統一・独立・自由」とし、これを日本と日本人に適用する時、この思想は欧米から離脱するための手段になった。またこの思想は一般の政治思想の領域では「デモクラシー」になるが、海老名の思想は欧米諸国とキリスト教からの離脱と自主自立を強調する中で「国家主義的」デモクラシーを経て「帝国主義的」デモクラシーへと変容していった。国民の参政権についても批判的であり、絶対君主制である明治維

新を日本におけるデモクラシーの原点とする海老名には、日本の自主独立、そして欧米と対立する日本帝国の建設こそデモクラシーの完成であると考えてに至った。教会のデモクラシー論である「会衆主義」から出発した海老名のデモクラシー論は、結局天皇制を容認し前提とする「民本主義」に帰結する。「国家至上主義と帝国膨張論」に集中した海老名は結局、「国家のため手段として存在する国民」をも認めることになる。

しかし、吉野は海老名が国家主義を正当化するため「デモクラシー」概念を歪曲する矛盾を批判し、柏木も新島から学んだ会衆主義とそれに基づいたデモクラシー論に従い、海老名とは異なる立場を見せる。すなわち二人は海老名の矛盾と限界を発見し、「人格主義 → 自由平等実現 → 神の国建設」の過程で国家の要素を相対化し、「個人と国家」との緊張関係と調和を最後まで模索した。その反面、海老名には日本の精神、すなわち大和魂を欧米の脅威から守ること、そして大和魂を普遍化・世界化する帝国の建設こそ日本における「デモクラシー」の実現であると考えたので、神道への異なる立場によってデモクラシー理解にも相違が生じた。

6. 海老名と大正デモクラシー世代の「帝国」と「植民地(民)」理解

(6-1. 「内地」概念からみた日本の帝国主義理解)

普通名詞であった「内地」という言葉は、日本帝国が植民地を確保して行く中で「旧日本」、すなわち「本州・四国・九州のみを意味する固有名詞」として変容する。これは「大和民族」が世界の中心、宇宙の真奥であることを強調し「内地」と呼ぶ瞬間、植民地としての「外地」と自らの間に線引きをする差別用語であり、内地を中心に置いて「日本帝国」の膨張を肯定する用語であった。海老名はこの「内地」という用語を、弟子渡瀬とともに積極的に受け入れる。しかし、二人の朝鮮伝道論に批判的であった吉野や柏木はその言葉の使用に消極的であった。「内地」という用語を採用する箇所も散見されるが、そのほとんどが内地や内地人の政策と活動を批判するために意図的に使われた。「内地」という新たな固有名詞を受容する態度にも日本固有の「神道」をどのような姿勢で扱うのかは関係があると考えられる。「大和魂」、「八紘一宇」などの同心円的な帝国膨張の中心には「内地」が置かれているからだ。

(6-2. 「植民地民」理解からみた「人間」理解)

海老名は琉球人やアイヌはもちろん、朝鮮人や中国人、満州人など、当時日本帝国が占領し支配していた植民地の人々を「土人」と呼んだ。これは文明人としての日本人(内地人)が、未開の野蛮人として外地人(植民地民)を考えた言葉である。一方、吉野は植民地で蔓延している「差別」を排撃するため「土民」という用語を使う。これは政治的な意味で、「内地人」(日本人)と「外地人」(植民地民)が同じ日本帝国に属している「公民」として同等な「民権」を持っているという観念から使われている。さらに、もうひとりの弟子、石川三四郎は「デモクラシー」の訳語として「土民生活」という表現を発明し、世界人類の平等な段階の意味まで深めて使う。海老名が「土人」という言葉で植民地民を低く評価した根底には、多神教・迷信の幼稚な要素を脱却した「国家神道」の一神教的な進化と倫理的な発展を「選民意識」として内面化した結果である。そして「敬神」精神としての「天照大神」を世界化・普遍化するため、日本のキリスト教がそれを支え、植民地にも扶植できると考えた海老名の認識の背景である。

7. 海老名と大正デモクラシー世代の「神の国」と「社会主義」理解

(7-1. 地上における「神の国」理解)

海老名は地上における「神の国」を日本帝国主義を通して理想化した。そのため帝国が持つ「多民族性」を肯定し「国際主義」と「博愛主義」を強調したが、「内地」と「土人」の問題でも指摘されたように、海老名は大和民族の優越性と選民意識に満たされていたために「内地=大和魂」に基づく「多民族ナショナリズム」を志向した。これは「国家神道」の宗教性も認め植民地民を宗教的、信仰的に動員しようと試みた植民地における「帝国神道」との関係がある。しかし海老名の「神の国」理想に不安を感じた中島重は、日本帝国の武断的な統治を変える代案として「多元的国家論」に基づく「神の国」理解を展開した。

そして中島に大きな影響を与えた賀川は、海老名の国際主義の矛盾(閉鎖的な方向性)を批判し、海老名が日本をキリスト教化し、日本の国際性を確保するよりは、むしろキリスト教を日本化する国粹主義に陥っており、それは一言で「キリスト教の神道化」(賀川豊彦『尽きざる油壺』、60.)であると批判した。このように「神の国」理解に関する海老名と弟子たちの相違の裏にも互いに異なる神道理解が存在した。

(7-2. 社会主義と社会的実践の問題)

「社会主義」と「社会的実践」の問題について、海老名は賀川豊彦と論争を行なった。海老名は賀川が「中古思想」に陥り、無駄な社会的救済活動を行っているとして批判した。しかし反論した賀川は海老名の「楽観(楽天的)社会思想」を批判し、海老名の「批判する資格」を指摘する。二人は「贖罪愛」に関する解釈にも相違をみたが、この問題は結局「社会主義」の評価にまで繋がる。海老名は社会主義を批判した反面、賀川は社会主義を肯定した。ここで柏木は賀川の活動を高く評価し、社会主義の可能性も肯定しながら、社会主義同様資本主義にも欠ける部分はキリスト教が補完すべきであると強調した。国家神道の倫理性はもちろん教派神道の宗教性をも積極的に受容してキリスト教との結合を模索した海老名の社会思想は結局「帝国主義」と結ばれていたが、神道について否定的な姿勢を見せた賀川と柏木は「帝国主義」とその膨張に伴う「戦争と支配」を批判し、社会主義の人間平等主義に期待した。

吉野、柏木、石川、中島、賀川などは各々の立場と路線で絶対君主制に抵抗した「大正デモクラシー」世代として、新たに変貌して行く近代の「神道」が日本における「デモクラシー」実現と具体化の邪魔になると考えた。それは「神道」を日本における「古い律法あるいは旧約」と捉え「新しい約束あるいは新約」であるキリスト教と接触させようと試みた海老名とは対立することになった。「神道」と彼らの社会思想の対立が深く関連付けられている理由である。

8. 結論

キリスト教と神道を結合させようとした海老名弾正の姿勢は、地上における「神の国」実現であると確信した「日本帝国」の膨張に貢献するための海老名式の方法論であった。すなわち、日本固有の「敬神」精神を完全な「倫理的宗教」の次元に到達させ、世界化・普遍化させるためにはキリスト教との結合が必要であると考えたからである。したがって、キリスト教は愛国のための手段になってしまった。結局「キリスト教と神道」、「キリスト魂と大和魂」、「神の国と日本帝国」という一致すべき課題の前で海老名は独特な神学的解釈を試みて、そのような宗教思想に基づいて社会思想(デモクラシー・国家および帝国観・社会主義など)をも形成することになった。海老名の社会思想形成の背後にはこのような海老名の神道的キリスト教、具体的には内地日本における「国家神道」の倫理性と植民地で行われた「帝国神道」の宗教性をすべて摂取包括したキリスト教を考えた。